# 中国語母語話者を対象とした日本語の複合語アクセントの指導法
## ―― VT 法の指導効果をめぐって ――

崔　　春福，吉田光演

## 1　はじめに *

中国語母語話者のアクセントの誤りに関しては，母語の干渉，訓練上の転移[1)]，過剰一般化など，様々な要因が挙げられるが，アクセントの機能の相違も大きく関与している。中国語の声調アクセントは弁別機能が主たる機能であり，統語機能は弱い。一方，日本語の高低アクセントは弁別機能よりも統語機能のほうが重要であり，話し言葉では２単語（以上）の連続が複合語なのか，別々の単語なのかはアクセントパターンによって決まる。中国語母語話者は，こうしたアクセントの統語機能に対する認識が不十分なため，複合語をばらばらに単一語として読んでしまう傾向が強い（朱春躍 1993)。

そこで，本研究では，中国語母語話者を対象として，VT 法という指導方法を用いて日本語の複合語アクセント指導を行い，VT 法の指導効果を実験的に検証することを目的とする。

## 2　日本語アクセントの機能：弁別機能・統語機能

日本語には，共通語のアクセント機能として，弁別機能と統語機能がある。

(1) 語の意味を区別する弁別機能（示差的機能）

[雨][飴]，[端][箸][橋]，[熱い][厚い]，[朝][麻] などの同音語の区別をする働きがある。鹿島（1999）は，アクセントの機能について次のように述べている。アクセントは一つ一つの語について決まっているので，ある語がどんな意味を持つのか判断するときにアクセントが貢献している。これは特に，同音異義語の区別を考えると明らかである。たとえば，「雨－飴」「電気－伝記」「兄弟－鏡台」などのような例が多数あるが，この働きを弁別機能という。また，同音で構成された語だけではなく，音構成は多少違っていてもアクセントの違いだけを聞き取って語の違いを判断することも日常よくある。上述の鹿島（1999）の例だが，ラーメンを「ふたつ」と注文したのに，厨房にもどったウェートレスが「ひとつ」と調理人に言ったように聞こえたことがあったという。確認してみると，やはり一つしか注文されていなかった。厨房は離れたところにあり，個々の音ははっきり聞こえなかったが，アクセントでこのような判断が可能になった，という。即ち，「ふたつ」が「ふ」は低く，「たつ」が高いのに対して，「ひとつ」では「と」だけ高いというアクセントの配置の違いが意味の弁別に役立ったのである（鹿島(1999)『日本語教師養成講座シリーズ　音声，語彙，文字・表記』p.58)。

(2) 語と語の切れ目，語のまとまりを示す統語機能

たとえば,「ニワニワニワトリガイル」という表現はアクセントによって２つの意味になる。

ニワニワ／ニワトリガイル　(「庭には　鶏がいる」)

ニワニワ／ニワ／トリガイル (「庭には２羽　鳥がいる」)

このようにアクセントは語（文節）の境界を示し，さらに，語（文節）のまとまりを示す働きがある。これをアクセントの統語機能（境界表示的機能）という。　上の例のような「ニワ（２羽)」と「ニワ（庭)」のような語を区別する働きは弁別機能（示差的機能）である。

アクセントの機能をまとめると次のようになる。

統語機能　・語（または文節）の先頭を示す。

・語（または文節）のまとまりを示す。

弁別機能　・語（または文節）中のアクセントの下がり目を示す。

## ３　中国語母語話者の複合語アクセントの誤用分析とその要因

中国語では，例えば「外国人労働条件法案」という複合語の場合，「外国人」「労働」「条件」「法案」という個別の単語の声調アクセントは，それらが複合した語句においてもほとんど変化せずそのまま保たれる。これに対して日本語では，「外国人労働条件法案」という語句を構成する個別の単語のアクセントは消えてしまい，「ガイコクジンロードージョーケンホーアン」と，全体が一つの単語になったように，高いピッチが平たく長く続く，中高型の新しいアクセントを獲得する[2)]。この日中両語のアクセント構造の違いから，中国語を母語とする学習者は，日本語の長い複合語句の中高型アクセントを，高いピッチ部分が異常に長いものとして感じる。そこで，この平たく高い部分のどこかでピッチを上げ下げすることによって，この違和感を解消しようとするわけである。この際，たとえば上述の例の「外国人」「労働」「条件」「法案」それぞれの単語のアクセントを既に学習している学習者は，その個別単語の本来のアクセントを実現しようとする。これは既に日本語の正しいアクセントとして習得したものであり，その知識を利用するのがもっとも安全かつ正確だと考えるからである。このことはむしろ当然のことである。しかし，残念ながら日本語の複合語では，これは誤ったアクセント実現の方法になってしまう。

以上のように，漢字圏の学習者は音韻論的にだけでなく，語構成の面でも母語からの干渉を受けやすい。従って，日本語アクセントの統語機能については，非漢字圏の学習者以上に注意を喚起させる必要がある。そのためには，初級段階から長い語構成の語句のアクセント練習をしておくことが大切だと思われる。個々の単語の練習だけに集中してアクセントの指導が済んだと思っていると，中級になって語彙が増えるに従って，かえって個別単語のアクセントを横

並びにした誤った複合語のアクセントを生成するようになってしまう危険性もある。

## 4　日本語教育におけるアクセントの指導法

### 4.1　日本語アクセント指導の問題点

日本語教育では，初級で単音を中心とする基本的な発音教育が行われた後は，中級でも上級でも発音教育が組織的にはなされないという傾向がある。特に，アクセント，イントネーション，プロミネンス，リズムなどの超分節性のある音調（プロソディ）上の要素は指導が徹底していないように思われる。文法や語彙の面では十分な知識のある中・上級の日本語学習者にも，かなり不自然さの残る発音で話している学習者がよく見られるからである。

日本語の発音指導において音調上の指導が立ち遅れているのは，いろいろな原因がある。まず，文法や語彙の教育に時間をとられて，発音の指導どころではないという状況がある。また，発音指導というと，単音の指導に偏ってしまう傾向も多い。しかし，少なくとも初級から中級にかけては，発音指導はカリキュラム上，文法や語彙の指導と同程度に重要視されるべきであり，その中でも音調上の要素は単音よりさらに重きを置かれてよい。

次に，音調上の超分節的な要素に関する研究が，単音のように明確に分節できる音声的要素の研究に比べて，まだ遅れていることが挙げられるだろう。

もうひとつの原因は，音調の指導技術が確立していないことである。これは，まず音調上の要素についての研究が不十分あることに基づくものであるが，この方面で十分に体系的な記述研究がなされたとしても，それだけで問題がすぐに解決するわけではない。というのは，発音の習得というのは，調音器官の操作による音声の生成という側面だけではなく，モデルとなるべき言語素材（ここでは，日本人の発話する日本語音声表現一般）の聴取とその解釈という側面，そしてその素材の学習という側面をあわせ持つ複雑な心理的・生理的過程であるからである。現在までのところ，アクセント指導に関するアイデアは，音声の記述的研究の専門家からなされることが多かった。一方，そのアクセント習得の聴取・学習という側面についての考察はまだ不足しているように思われる。たとえば，「X語話者は，母語にこれこれのアクセント構造があり，そのため日本語アクセント生成ではピッチの上がり方に問題があるから，そこをきちんと教えなければならない」という指摘はあるが，どうすればそれがきちんと教えられるのかについては述べられていない（川口 1984)。「低高」のピッチの語句や「高低ー低高」のミニマルペアをただ何回も繰り返して聞かせ，発音させるだけでなく，ピッチの差を聞き取ることができ，かつ正しく再生できるような手がかりを学習者に分かりやすく提示しなければならない。学習者に自己の学習能力を生かせる積極的な学習方法を提示し，「聴取ー学習ー再生」という発音習得過程を有機的に統合する指導法を確立する必要がある。

## 4.2　VT法（Verbo-Tonal Method）

日本語において，アクセントの指導に「VT法」の「身体リズム運動」を取り入れ，様々な学習者に手や首を動かしながら発音させ，指導方法を工夫して変えることで効果があったということが近年の研究で明らかになっている（川口 1990）。

「VT法」とは，ペタル・グベリナ（1981）による，「言聴聴覚論」という言語理論に基づいて考え出された音声指導（矯正）法であり，聴覚，視覚，触覚，運動感覚などを活用している点が大きな特徴である。身体は音声の伝送体・受容体であり，音声は聴覚・調音器官だけで聞き取り，生成されるのではなく，同時に身体（骨，腱，筋肉，皮膚）を通して振動として知覚される。すなわち，音声の聴取・生成は，身体全体と聴覚・調音器官との相互活動であるといえる。身体全体を調音器官・聴覚器官と捉え，マクロ（身体全体）の動きで（ミクロ）の動きを誘導し，正しい聞き取りと生成を促す，とされる。

### 4.2.1　VT法に基づく発音指導の原理

VT法による発音指導方法には，次のような5つの特徴がある。

①調音法の指導を優先させるのではなく，全体構造の中で聴取を優先する。

②リズム，イントネーションの指導を単音指導よりも優先し，学習言語の「言語らしさ（たとえば，日本語らしさ）」を定着させる。

③調音活動に伴う音声的緊張性と弛緩性を重視する。

④総体としての音声を崩さないという意味で，単音指導に際しても，言葉の意味，プロソディ，状況・場面などを考慮する。

⑤母語による調音習慣は，母語により条件づけられた無意識的現象であり，言語音を習得するためには，分析的，意識的ではなく，自然に無意識的に学習できるよう指導する。

外国語学習者は，母語の音韻体系に基づいた音声上の誤りをおかす。この音声上の誤りは一つの体系をなしており，母語と学習する目標言語の種類により異なる。外国語音声の生成（再生）は，調音習慣を若干変化させようと働き，調音器官の生体反応によって拒絶されてしまう。その結果，外国語の音を自分にとって最も聴取しやすい慣れ親しんだ母語の音に置き換えて発音することになる。こうした，外国語の音韻体系と母語の音韻体系の相違により生じる音声上の誤りを，言聴聴覚論では「置き換えの体系」と呼んでいる。効果的な発音指導を行うためにも，学習者の置き換えの傾向，種類，頻度などを考慮することが大切だと主張している。

VT法では，学習者の音声上の誤用を調音法や調音点の相違ではなく，音声的緊張（調音活動に伴う調音器官の緊張）によって説明している。この考えに従えば，緊張過度が原因の場合は発音を弛緩させ，弛緩が原因の場合は発音を緊張させて矯正することになる。指導者は学習

者の母語を知らなくても誤用の原因を緊張と弛緩で説明できれば，矯正すべき方向を見い出せると考えられる。

### 4.2.2 先行研究

・川口による研究

川口（1987）は，1986年に試験的に行われた「発音矯正課外指導クラス」の実践報告である。対象者は早稲田大学語学教育研究所の日本語専修学生で，対象者は「語彙・文法面では充分な習得が行われているが，発音には相当程度不自然さが残る発音で発音して」おり，「個別の単音はもとより音調上での発音矯正の必要な」学生であった。川口は，「VT法」の中でも，外国語の発音習得，矯正指導のための「身体リズム運動」に注目し，発音指導を行った。それまで，外国語としての日本語の発音指導に「VT法」の「身体リズム運動」を応用した実践例の報告はなかったため，その具体的な方法，考察は非常に興味深く，参考になる点が多い。

川口（1990）では，アクセント指導に「VT法」の「身体リズム運動」を取り入れ，様々な母語の学習者に，手や首を動かしながら発音させた。そして，方法を工夫して変えることによって効果があったケースについて報告し，アクセント練習のための「運動」には，「唯一絶対のものはない」と述べている。大事なことは，教師の自己受容性（発話音の位置・運動・緊張を体感する感覚）を正しく再現でき，学習者にも物理的・心理的に受け入れやすい運動であるということである。あとは学習者の「創造性」に任せるべきだと述べている。

・木村による研究

木村（1996）は，「VT法」の基本となった言語聴覚論を解説し，日本語の発音指導を紹介している。イントネーション，促音，わらべうたリズムの指導方法が紹介されており，それぞれ代表的なものが取り上げられている。また，この文献には付属ビデオがあり，模擬授業ではあるが，実際の授業風景を見ることができる。ビデオを見れば，具体的にどのような手の動きをするのかを見ることができる。

・土岐哲氏の記述

動作を伴ったアクセントの生成指導技術は，これらの文献以外にも紹介されている。例えば，『日本語教育事典』（1982）には，土岐哲氏の記述によって，アクセントの高低感覚を養うための具体的方法として「声の高低に合わせてこぶしを上下させる」方法が紹介されている。ただ，この方法では「声に合わせて」とあるように，こぶしの動きはアクセントを視覚化するための補助手段であるにすぎない。一方，「VT法」の「運動」は，「運動」の繰り返しによって学習者の身体に言語のアクセントのありかたを受容しやすいような環境を作るという意味で，より積極的な役割を担っているのである。

### 4.2.3　問題設定・仮説

以上，日本語教育における「VT 法」の先行研究を見てきた。しかし，現在までの日本語教育における「VT 法」の研究においては，その方法論を論述したものが多く，学習者が「VT 法」の授業をどう感じているのか，実際に指導効果があるのかということについての報告は少ない。

そこで，以下では「中国語母語話者を対象とした VT 法によるアクセント指導」を実験的に行い，学習者がどういった感想，意見を持つのか，学習効果はあるのかということを分析する。VT 法による指導効果を測定するため，まず，被験者を２つのグループに分ける。一つのグループは，VT 法を用いて練習する実験群とし，もう一つのグループは，従来の指導法を用いて練習する統制群とする。実験群と統制群の指導前後での得点を分析することによって，VT 法による指導効果を比較検証する。

## 5　実験の方法

### 5.1　被験者の抽出基準について

①１年以上～３年未満日本に滞在する者で，中国語を母語とする中国語母語話者15名。

②「留学生（学生）生活」というキーワードで抽出した語彙計30個を別々に被験者に呈示し，呈示した単語のアクセントに対して被験者がどれぐらい習得しているかを判定し，それに合わせて単語レベルを設定する。

③②の結果で被験者のレベルを評価する。

### 5.2　問題の作り方

①5.1-②において，被験者全員が正しく答えることのできる単語（資料の中の灰色の単語）のみを抜き出す。（例：「駅」，「銀行」）

②-①で抜き出した単語15個のみを使って複合語を作る。ここでは，意味的な連合関係のない複合語を作成した。（例：「駅銀行」など）

③-②で作った複合語の中から，仮に36個を任意に選ぶ。

④-②の単語群から仮に15個の単語を選ぶ。

⑤-③と④で選んだ単語は全部51個で，複合語と単一語をランダムに混ぜた。

⑥カードは３種類準備したが，その内容はアクセント型を考慮して均一的にした。

| 実験１－語彙（30個） | | | |
|---|---|---|---|
| 型 | 拍 | | |
| | 2 | 3 | 4 |
| 平板型 | | 頭 | 銀行 |
| | | 隣 | 来週 |
| | | 会話 | |
| 頭高型 | 母 | 家族 | 音楽 |
| | 夜 | 意見 | 来月 |
| | 妻 | 天気 | 毎月 |
| | 空 | 緑 | |
| | 駅 | | |
| 中高型 | | 心 | 飛行機 |
| | | | 図書館 |
| | | | 果物 |
| 尾高型 | 国 | 男 | 台風 |
| | 歌 | 歴史 | 工場 |
| | 姉 | | |
| | 色 | | |
| | 塩 | | |

### 5.3 実験手順

①被験者15名を２つのグループに分け，８名はVT法を用いて練習するグループ，残り７名は従来の指導法を用いて練習するグループとする。

②5.2-⑤で選んだ単語群51個をランダムに被験者に呈示し，カードを見せて練習する。

③VT法を用いて練習するグループ：

手の具体的な動きに関しては，木村（1996）を参考にした。指導の具体的な流れとしては，教師が手の動きをしながらモデルの発音を示し，被験者は，教師と同じ動作をしながら発音練習をする。練習時間は15分で，被験者個々が手の動きと共に発音し，うまく発音できない箇所については，手の動きに関してコメントを与えながら，よりよく発音できるように手の動きを修正させる。練習が終わった後，手の動きをせずに発音してみる。

一方，従来の指導法を用いて練習するグループでは，以下の流れとする。

①まず，教師が被験者にカードを見せながらモデル発音を示す。その際，被験者は教師のモデル発音について発音する。②その後，練習時間15分を与えて反復練習をする。③練習が終わった時点で，最後にもう一度発音をチェックする。

どちらのグループでも発音をチェックする際，大事なのは複合語の発音の正誤と単一語の発音の正誤である。

### 5.4　実験結果

実験の結果を示したものが表１と表２である。

表－１

| B（VT 無し） | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 被験者 | 誤用数（y） | 誤用率 | 改善数（x） | 改善率（x/y） |
| B-1 | 30 | 58.8% | 13 | 43.3% |
| B-2 | 32 | 62.7% | 7 | 21.9% |
| B-3 | 35 | 68.6% | 8 | 22.9% |
| B-4 | 23 | 45.1% | 13 | 56.5% |
| B-5 | 32 | 62.7% | 8 | 25.0% |
| B-6 | 31 | 60.8% | 10 | 32.3% |
| B-7 | 32 | 62.7% | 7 | 21.9% |
| 合計 | 215 | | 66 | |
| 平均 | 30.7 | 60.2% | 9.4 | 31.9% |

表－２

| A（VT 有り） | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 被験者 | 誤用数（y） | 誤用率 | 改善数（x） | 改善率（x/y） |
| A-1 | 37 | 72.5% | 28 | 75.7% |
| A-2 | 5 | 9.8% | 4 | 80.0% |
| A-3 | 8 | 15.7% | 7 | 87.5% |
| A-4 | 34 | 66.7% | 30 | 88.2% |
| A-5 | 27 | 52.9% | 24 | 88.9% |
| A-6 | 4 | 7.8% | 3 | 75.0% |
| A-7 | 20 | 39.2% | 19 | 95.0% |
| A-8 | 30 | 58.8% | 27 | 90.0% |
| 合計 | 165 | | 142 | |
| 平均 | 20.6 | 40.4% | 17.8 | 85.9% |

被験者の得点から分かるように，誤用数が同じ30個の B-1と A-8を比較してみると，B-1は誤用数の30個の内，練習によって13個しか改善できなかった。これに対して，「VT 法」有りの A-8は誤用数の30個の内，練習によって27個も改善した。およそ，２倍ほどの改善がなされた。また，誤用数が35個の B-3と誤用数が34個の A-4を比較した場合，B-3は誤用数が35の内，８個しか改善できなかった。これに対して，A-4は誤用数が34個の内，30個も改善することができた。

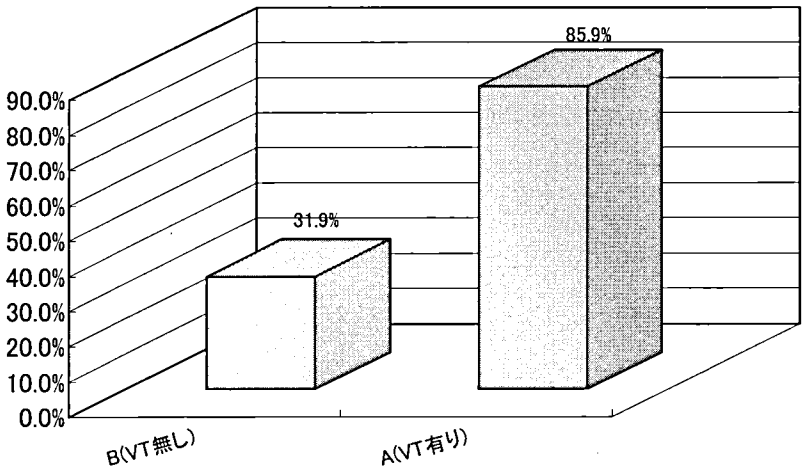


**図１　改善率の比較**

グループ全体で見ると，図１が示すように，VT 法無しのグループＢの改善率は平均31.9%，VT 法有りのグループＡの改善率は平均85.9%であった。結果から見ると，アクセントの明示的な指導によって，一般にアクセント誤用が改善できること，VT 法を用いたグループは，従来の指導法を用いたグループより，効果が著しくあることが明らかになった。

## ６　考察と課題

以上，本論文では，中国語母語話者を対象に，VT 法による複合語アクセント指導を行い，その効果を実験的に検証した。

学習者がアクセントの指導を受けることによって，指導前よりも発音をより意識するようになったことが分かった。たとえば，「VT 法による日本語アクセントの指導法を教えてもらったので，日本語のアクセントが分からなくなった時などは自然と手を動かしながら発音するようになった」などと感想を書いた学習者もいた。つまり，VT 法は日本語のアクセントを学習する場合だけではなく，学習内容を復習する際においても重要な手がかりとなっていると思われる。また，複合語の指導をする際，アクセントが上昇，下降する箇所を示すことが曖昧になり，分かりづらいことがよくあるが，VT 法の「身体リズム運動」で視覚的な情報を明示的に与えることによって，これを一定程度改善することができる。

しかし，問題点も残った。被験者を２つのグループに分ける際，２グループ間の差を厳密には均一化することができなかった。被験者17名を２つのグループに分ける際に，発音テストの成績と日本での滞在期間，日本語学習経験などを考慮して，日本語能力がほぼ同じだと判定できる中国語母語話者を（１番目の得点の話者をＡ，２番目をＢ，３番目をＡ，４番目をＢに一

というように）おおよその目安で２つのグループに分けていった。従って，この実験に関しては一定の傾向を抽出することができたが，厳密な比較を行うためのグループ統制は完全にはできなかった（平均的に見て，ＡとＢのアクセント能力の差がまったくないとは言い切れない）。

今回の実験では，アクセント指導の時間が短い時間であったため，学習者に日本語のアクセント規則を完全に修得させるまでは至らなかった。しかし，アクセント指導を行うことによって，学習者に日常的にも発音を意識させることができることが分かった。重要なのは，授業で練習した単語を完璧に発音できるようになるのではなく，発音に学習者の意識を向けさせることである。その点に関しては，十分に効果があったといえるであろう。

次の課題としては，さらに細かい指導方法を検討するとともに，長期的に指導を行い，複合語のアクセントだけでなく，複合語以外の単語についてもいかにすれば，正しい発音ができるようになるのか，という点を明らかにしなければならない。今後は，VT 法をもとにして，さらに指導方法を検討し，従来の日本語教育方法を批判的に検討し，技術指導法を向上させるために，具体的な方策を提案していきたい。

最近の「学習者中心の教育」の見方に立てば，教師の役割は，学習者を指導するというよりも，学習者を支援することであると考えられる。聴覚的情報，視覚的情報，VT 法に基づく「身体リズム運動」による情報など、さまざまな情報を学習者に提供し，学習方法を見つけるようにすることである。「唯一絶対の教授法はない。」，「学習者の適性に合わせた教育」という言葉があるように，学習者個々人によって効果的な指導法は異なる。「母語別の指導」を考えるとき，重要なのは，ある指導方法はある母語話者にしか使えないと思い込むより，誤りの原因が異なっていても他の言語話者にも使ってみる，一つの指導方法だけではなく，効果的な方法があれば，それは伝統的音声学の理論から若干逸脱していても，積極的に実践する価値がある。このようにして，より効果的な教育方法を模索していくことが大切である。

## 注

* 本稿の内容の一部は，筆者の一人（崔）が広島大学大学院社会科学研究科に提出した修士論文（崔（2007））に基づき，それを崔・吉田が加筆修正したものである。

1）訓練上の転移：教室での教師の指導や訓練がなんらかのかたちで学習者にマイナス影響を与えること。

2）最近では，元の単一語のアクセントを保持し，２つの高いヤマがあるような複合アクセントで発話する傾向も時折見られる（テレビのアナウンサーが，「豪華商品」を「コーカショ|ーヒン」と話すような例）。

## 参考文献

天沼寧，大坪一夫，水谷修（1978）『日本語音声学』くろしお出版.

鹿島央・王伸子ほか（1999）『日本語教師養成講座シリーズ　音声，語彙，文字・表記』凡人社.

加瀬次男（2001）「読みに求められる音声表現要素」『コミュニケーションのための日本語・音声表現』，pp.145-150.

川口義一（1987）「発音指導の方法」『講座日本語教育』第23分冊　早稲田語学教育研究所，pp.48-63.

川口義一（1990）「日本語アクセント指導方法」クロード・ロベルジュ，木村政康編著『日本語の発音指導－VT法の理論と実際－』凡人社，pp.115-136.

木村政康（1996）「VT法（ヴェルボトナル法）」鎌田修，川口義一，鈴木睦 編著『日本語教授法ワークショップ』 凡人社，pp.151-175.

金田一春彦（1998）「共通語の発音とアクセント」『NHK日本語アクセント辞典』日本語放送協会，pp.90-122.

崔春福（2007）『中国語母語話者を対象とした日本語アクセントの指導法の研究』広島大学大学院社会科学研究科・国際社会論専攻　修士論文.

朱春躍（1993）「中国語話者の日本語アクセントの習得－その特徴と指導上の問題点をめぐって－」『第7回大学と科学公開シンポジウム国際化する日本語－話し言葉の科学と音声教育』クバプロ，pp. 179-184.

土岐哲（1982）「アクセント」『日本語教育事典』日本語教育学会編　大修館，pp.26-43.

日本放送出版協会・編（1998）『NHK日本語発音アクセント辞典　新版』.

ペタル・グベリナ論述／北原一敬・内藤史郎編著（1981）『話しことばの原理と教育－言聴聴覚法の理論－』明治書院.

望月八十吉（1974）『中国語と日本語』（中国語研究学習双書13）光生館.

【付録】

| 実験1—複合語 | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| ① | チェック欄 | ② | チェック欄 | ③ | チェック欄 |
| 会話果物 | | 駅会話 | | 空男 | |
| 果物会話 | | 歴史飛行機 | | 来週歴史 | |
| 隣 | | 隣 | | 頭 | |
| 男台風 | | 空頭 | | 妻家族 | |
| 空歴史 | | 来週隣 | | 隣果物 | |
| 頭 | | 会話台風 | | 母隣 | |
| 台風会話 | | 隣台風 | | 家族 | |
| 飛行機頭 | | 歴史果物 | | 男来週 | |
| 男銀行 | | 夜 | | 飛行機 | |
| 駅 | | 駅飛行機 | | 空会話 | |
| 頭銀行 | | 母銀行 | | 果物 | |
| 飛行機歴史 | | 妻飛行機 | | 来週男 | |
| 頭台風 | | 駅歴史 | | 夜果物 | |
| 妻会話 | | 飛行機 | | 家族来週 | |
| 夜会話 | | 空来週 | | 妻 | |
| 妻 | | 台風頭 | | 来週頭 | |
| 果物家族 | | 会話 | | 駅 | |
| 意見台風 | | 夜銀行 | | 隣来週 | |
| 来週家族 | | 歴史台風 | | 銀行歴史 | |
| 来週会話 | | 家族 | | 駅隣 | |
| 飛行機 | | 空飛行機 | | 夜 | |
| 銀行頭 | | 駅 | | 会話来週 | |
| 家族 | | 夜飛行機 | | 果物頭 | |
| 意見銀行 | | 会話銀行 | | 空 | |
| 台風 | | 母台風 | | 母家族 | |
| 駅銀行 | | 母頭 | | 妻台風 | |
| 隣銀行 | | 飛行機男 | | 頭果物 | |
| 母飛行機 | | 歴史 | | 飛行機家族 | |
| 空台風 | | 銀行会話 | | 駅来週 | |
| 銀行男 | | 夜男 | | 歴史 | |
| 果物 | | 銀行 | | 男果物 | |
| 駅頭 | | 家族台風 | | 家族果物 | |
| 妻歴史 | | 頭 | | 歴史来週 | |
| 歴史銀行 | | 台風男 | | 台風 | |
| 夜 | | 飛行機会話 | | 妻来週 | |
| 夜歴史 | | 空 | | 銀行家族 | |
| 銀行 | | 妻頭 | | 母 | |
| 駅男 | | 台風歴史 | | 空果物 | |
| 妻果物 | | 意見飛行機 | | 銀行隣 | |
| 歴史 | | 妻 | | 母来週 | |
| 空銀行 | | 男飛行機 | | 駅家族 | |
| 男 | | 空家族 | | 銀行 | |
| 空 | | 台風 | | 果物会話 | |
| 母男 | | 果物歴史 | | 夜来週 | |
| 妻銀行 | | 男 | | 隣 | |
| 家族飛行機 | | 台風家族 | | 駅台風 | |
| 夜台風 | | 果物 | | 意見来週 | |
| 母 | | 頭飛行機 | | 会話 | |
| 会話 | | 夜頭 | | 家族銀行 | |
| 母会話 | | 隣飛行機 | | 男 | |
| 会話飛行機 | | 母 | | 妻男 | |

# Teaching of Japanese Compound Word Accent for Chinese Native Speakers — Effects of the Verbotonal Method with Reference to Japanese Learning

CUI Chun-Fu, YOSHIDA Mitsunobu

Accent errors of Chinese speakers learning Japanese are caused by various factors: negative interference of L1, transfer in language training, overgeneralization, etc. Among others, different functions of tonal accents between Chinese and Japanese are a major source of the errors. Chinese four tonal accents, which are constant at the phrasal level, have the distinctive functions of identifying the meaning of words with the same phonemic representation. On the other hand, Japanese accents have not only this distinctive function but also the syntactic one: Japanese accents delimit the boundary of a syntactic phrase or a compound word so that they vary from context to context (only one low-high pitch in a compound). Due to this difference, Chinese learners tend to pronounce each minimal word with separate accent patterns. Even advanced learners sometimes produce wrong accent patterns since they are not explicitly taught compound word accent rules. Therefore, a more effective instruction for the prosody in Japanese should be developed. In this paper, we investigate a teaching method of Japanese compound accents in terms of the Verbotonal method (VT) advocated by Petar Guberina. The VT method uses the body movement in language learning focusing on the global sound-meaning structure and the context in which phonetic, rhythmic and intonational outputs are evaluated. Based on previous studies of the VT method in Japanese teaching, we designed an experiment to evaluate effects of an explicit instruction of Japanese compound accents. We selected 15 Japanese words that have two or three moras and various accent patterns (initial accent, accent on the second syllable, unaccented flat pattern etc.) and created 36 compound words without semantic associations by means of the 15 words ("sora" (sky) + "atama" (head)--> "sora'atama" (sky-head)). Participants were 15 Chinese native speakers learning Japanese. They were divided into two groups. At first, the two groups were shown the 51 Japanese words (15 single words and 36 compounds) and pronounced them. Second, 8 participants in one group were taught the compound accent rule by a VT method (up-and-down arm motion), while in the other group 7 participants were instructed by a traditional method with a graphic illustration of

the accent patterns. As a result of the experiment, the group with a VT method showed a significant improvement in accentuation of the words (85.9% improvement) while the group with a traditional method improved 31.9%. Thus, the VT method turned out to be effective in the instruction of Japanese compound accent rules.